



1. 平成 18 年度支部活動報告

- (1) 平成 18 年度収支報告・・・会員に送付済みですので省略します
- (2) 来訪トラベラー

平成 18 年度の東北地区へのトラベラー数 (実数)

アメリカ	2
カナダ	1
チェコ	1
ドイツ	5
フランス	5
オーストラリア	3
スペイン	1
スウェーデン	1
合計	19

会員受入数 延べ数 30名

2. 会員レポート

(1)ドイツからアンソニー君 (T)

アンソニー君から日本語でメールを貰ったには7月の末であった。9月の下旬来訪予定と言うので9月22日(金)午後6時山形駅で会いましょうと返信した。彼はドイツのテュービンゲン大学で日本語と美術史を専攻している。元々はアメリカからの交換留学生であったが学位をドイツでとるため大学を変えて勉強している。日本にも友達がおりに、前日にその人から電話があった。

彼は日本の歴史に特に興味があり、蔵王の後、山寺を案内した。石碑、岩壁に彫った文字、卒塔婆などに関心を示しているいろんなことを聞いてきた。

また松尾芭蕉の俳句を説明していたら、彼自身も詩を作ると言うことで、帰る時に彼が撮ったと言う一枚の写真を置いていった。遠景にイスタンブールを望む夕暮れのボスポラス海峡(5年前に私も一度行ったことがある)の写真で一篇の詩がドイツ語と英語で書かれていた。

the horizon is a fragment of the horizon

地平線は全ての地平線の一部

words are a fragment of the silence

言葉は沈黙の一部

people a fragment of their gods

人は神々の一部

彼は詩人だったのかと帰ったあとで気がついた

(2) スペインのトラペラー……(T)

youth counseling、独身。当初泊まるだけで、翌日は自分で行動すると言うことであったが、聞いてみると蔵王山に登りたい、お釜を是非みたいと言う。しかもその後盛岡まで行く予定であった。山形駅から蔵王温泉までバスで50分、ケーブルカーで地藏岳まで1時間更にお釜の写真を撮れる場所まで1時間、合計往復6時間が必要。

お釜の写真や山の魅力を書いた詳細なガイドブックを持っており、趣味が写真というだけに撮る場所、カメラアングルに拘る彼であった。

それではと私もカルチャー教室の予定をキャンセルして、車で乗せて行くことにした。

我が家を9時出発。刈田駐車場には10時、リフトで馬の背まで歩いて10分、ようやくお釜観賞地に着く。丁度晴れ間の時でお釜の水の色は濃い緑色で実に神秘的な色をたたえており、将に絶景であった。

お昼の食事をして午後の電車で帰って行ったが、本当にショートステイでも色んな話をする事が出来た。スペインの文化、芸術、音楽そして社会生活など楽しい一日だった。

(3) サーバス体験 11月8～11月14日……(M)

[チェンマイにサーバス会員が一人だけいました]

5年前のバンコク国際会議参加したこともあって、タイは私にとって魅力のある国でした。今回初めて訪れたチェンマイでの体験はとても素晴らしく3週間たった今でも思い出すと暖かい気持ちになります。

チェンマイの魅力を書くには紙面を何枚も使わなければならないので、チェンマイのサーバス会員 **Thanit Boodphetcharat** との出会いについて書いてみます。タニ・ブンピーチャと日本語てきにはいいです……発音はとても難しいです。バンコクでは中国系のタイ人が多かったですが、タニさんは褐色の肌をした聡明そうな45歳の素敵な女性でした。環境問題に関する仕事をしていて日本に一度来ていました。サーバス・リストにはタニさんのメール・アドレスが載ってなくタニさんとは出発前に連絡が取れませんでした。しかしたった一人しかいないサーバス会員に是非とも会ってみたいと思って、彼女には私の認定書と手紙を送って日本を発ちました。チェンマイのホテルに到着してすぐタニさんと電話連絡が取れたのは良かったのですが、彼女が大変に忙しく働いている女性だとはその時は知らなかったのです。11月12日の日曜日の午前中は仕事、午後なら時間がとれますとのこと。ホテルで約束の時間から2時間遅れて到着、タイ人の時間の観念は日本のそれとは少し違うようでした。ラップトップ **CP** の入ったカバンともう一つ これまた書類の入った大きなカバンを2つをさげて、午前中の会議が終わって 急いでかけつけてくれたのでした。暑い国ですし、Tシャツなどラフな格好のチェンサイの人々のこと中で黒いスーツでバッチリと決めて、日曜日でも事務所で働くタニさんの姿に少し驚きました。タイのサーバス数60名ということですが、チェンマイは一人だけです。会員が増えないのは忙しくて何もしないからだと言いますが、女系社会のタイでは女性の会社経営者も多いそうです。タニさん自身も次の日の月曜日はから ラオスに仕事で出張があり、まだ書類のチェックが終わっていないとのこと夜になる前にお別れをしました。人と人との出会いはその 時間の長さではないと信じます。タニさんに会えたことは私のチェンマイの旅を とても豊かなものにしてくれました。

(4) チェンマイ報告 「毎週月曜日黄色一色になるのはなぜ!?!」……(M)

自分たちの住む町が、毎週月曜日に黄色の洋服を着ることになったら、どんなことが起こるのでしょうか。チェンマイとバンコクで、町中が黄色一色の光景を目の当たりにしたのです。

タイの国王が即位して60年目にあたる年が2006年の今年で特別な年だったのですね。暑い国ですから黄色のTシャツを着ている人がほとんどでしたが、中には黄色いスーツで格好良く決めている人もいました。ではなぜ黄色の洋服を身につけているかというと、国王のお好きな色が黄色だったのです。それも毎週月曜日に黄色の洋服を身につけるのですから日本では、いや世界中のなかでもタイという国だけではないでしょうか。私が滞

在中の11月13日の月曜日に、「何事が起こったの」と見慣れるまでとても驚いてしまいました。ホテルのフロント係、訪問した学校の先生と事務員、空港で働く人たち.....などなど一斉に黄色の洋服を着ていたのですから。一週間の短い滞りでチェンマイ(バンコクの空港でも同じです黄色の洋服を来ている人であふれていました)のことはほんのわずかしかりません。しかしもっと深く知りたいと思う気持ちが心からわきあがってくる魅力的な国です。

(5) フランスからの受入報告・・・ (A)

氏名；ピエール (30歳) ステファニ (27歳) フランス

受入期間；10月11日～13日 (2泊3日)

今回は、たぶん皆様が気になる食事のことを中心に報告してみます。

私は料理が苦手です。なのにサーバスブックに **cooking lovers and vegetarians welcome** と記載されているため、料理好きと勘違いされています。どうやら「私は料理が得意だからベジタリアンも心配いらぬよ」という意味にとらわれているようです。夕方6時到着で食事の用意にはたっぷり時間があつたので、昼から友人を招いて芋煮汁とサラダを作ってもらいました。ステファニが「こんなに具がいっぱいの味噌汁は初めてだ」というので「これは味噌汁ではない。メインディッシュだ」と説明。翌朝はピエールがオムレツを焼いてくれて、パンと飲み物と果物、ヨーグルト。私にとっては盆と正月がいっぺんにきたような豪華な朝食でした。

11時、松島へ出発。平日のためか空いていて嵯峨溪を貸切クルージングできました。

船長さんが「フランスの牡蠣はこの、この場所の、牡蠣が原種だかね」と船を止めて自慢するも、あいにく全員語学力不足のため感動せしめるに至らず気の毒でありました。

昼食はカット。一緒に買い物をして帰り、みんなで天ぷらに挑戦することになりました。お箸が難しいのでトングにしたら、ステンレスだから熱い熱いと大騒ぎ。どうなれば火が通ったか分からないので、代わる代わるかじって確認。後半は揚げ玉がいっぱい付いて、焦げ目もいっぱい付いて、フライのようになりましたが楽しい夕食でした。

三日目の朝は北海道に行くので8時出発。朝食は残り物の芋煮汁とごはんだけです。

その後、層雲峡の紅葉は素晴らしかった。ウチの食事も大変おいしかったとメールがきて自分で作らなくてよかったと思い、これからもこれ式でと食事問題はクリアできました。

(6) アメリカからのトラベラー受入報告・・・ (A)

氏名；フランク (68歳) メアリールー (68歳) アメリカ

受入期間；11月2日～5日 (3泊4日)

今回の食事私も私は何も用意しません。

2日の午前に到着したので、ピエールの時のように、友人をおびき出して作らせるという計画が頓挫してしまいました。秋保方面で紅葉見物して、昼食は農家風レストランで、赤米のおにぎり付きの「ほうとう定食」。夜はドーナツというのでお任せしてごちそうになりました。翌朝はフランクがクレープを焼いてくれて、手巻き寿司風にめいめい好きなものをのせて巻いて食べました。

区民祭りに行く途中八幡神社に寄ると、ちょうど七五三の参拝に着飾った愛らしい子供たちが来ていて、写真に収めることができました。祭りの会場では、すずめ踊りのパレードを見たり、チビッコ相撲を見たり、夕方まで楽しんで、またしてもドーナツを買って帰宅。何か作りましょうか?と聞くと「皿洗いしたくないから」というのでピザをデリバリ。次の朝もフランクのクレープ。この日は3連休とあって松島まで大渋滞。途中でやっぱりミスタードーナツ。サンディエゴの海はもっときれいだということでクルージング無しでみんなで買い物して帰宅。フランクが作るきのこスパゲッティを少し手伝いました。次の朝も残り物をいろいろのせてクレープ。

作並のウィスキー工場の庭を散策してレストランで昼食後14:30東京へ向かいました。

さて、フランクはとても働き者です。彼は料理も後片付けも完璧でキッチンはピカピカに磨き上げられました。その間奥様は何をしてたかというのんびりティータイムです。彼女は長い芸術的な爪をつけていて、その指をパチンと鳴らして「ハニー」というだけで何でも意のままになるのです。ハニーはすぐに駆け寄り要望に応えます。洗濯も布団敷きもホテルの予約もメールも実に楽しそうにこなします。彼女は一切夫のやることに口をはさみません。頼んだ以上当然ですが、女というものは些細な不満を見つけると黙っていないものです。これには感心しました。

ハニーが仕事を終えて戻ると、妻はほほえみながら優しく膝に手を置き無言で労をねぎらいます。

どうですか？夫は何も手伝わないとお嘆きの奥様、是非お試しください。

(7) 韓国からの受け入れ報告・・・(M)

2007年 1月7日～9日 韓国 李大榮（46歳） 崔美玉（43歳）

[似ているようで相違点もたくさんある日本と韓国]

李さん夫婦はサーバスを知ってから2年の新しい会員です。昨年は九州・中国支部で会員宅でホームステイの経験をしています。今回の来日が2回目で、冬休みを選んだのも雪が見たいからだそうです。幸い暖冬の仙台ですが1月8日は待望の雪が降り、雪の松島を見ることができ感激してもらえました。

李さんは女子高校の日本語の教師、奥さんは小学校の先生でお二人とも日本が大好きで、受け入れている私たちをほっとさせてくれました。私は韓国のホームステイを12月の寒いときに経験しています。外がどんなに寒くとも、会員宅Tシャツ一枚でも平気なオンドル暖房の暖かさを知っているので韓国の会員の受け入れに躊躇する気持があったのです。李さんは自分の生徒に見せるのだと、私の用意した冬用寝具の毛布に薄い布団と厚い布団と3枚かけるのが珍しいと写真を撮っていたのですから私の心配も危惧に終わったのです。

韓国人にとってキムチがどんなに大切な物かを韓国に行き知ったこともあり、食卓に用意をした。小ドンブリに一杯食べても平気なのにはさすが韓国の人と改めて感心する。日本人が食べる日本の白菜漬けや沢庵漬けとはだいぶ違うようだ。しかし若い世代はキムチ離れの人もでてきて、李さんの下の娘さんはキムチは全然食べないとのこと。伝統的な食材も時代と共に変化するのはどこ国も止めることができないほど、食の交流が進んでいるのかもしれない。二日目の夕食は手巻きずしにしたところ、キムチの辛さに平気でもワサビの辛さに慣れないのか「辛い!」を連発するのが面白い。

男尊女卑と一言で表現できないほど「男」中心の社会が現存していて李さんのように娘2人だけの場合の悩みを聞いた。韓国には韓国の長い歴史があるはずだから私が意見などはとても書けないけれど、李さんたち夫婦の肩身の狭さを少なくとも日本人はしなくてすむ。娘さんにお婿さんをとってもらって出来たことではないから。韓国にはこのような婿養子制度がないのだ。李さんの奥さんは43歳と微妙な年齢にある現在、親たちに「男の子が生まれるかも」と第三子を産むのはどうかと今でもプレッシャーをかけられるそうだ。今年の4月に開催される韓国釜山での極東アジア会議での再会を約束して、思い出深い楽しい交流の3日間を過ごした。

(8)「初めてのサーバス旅行(1)」・・・(T)

初めてアメリカに、サーバス旅行に行き来ました。期間は2006年10月5日から11月6日の一ヶ月。まずは一ヶ月、です。場所はニューヨーク市と隣のニュージャージー州にしました。広く、太陽の日差しが心地良いカリフォルニアも好きですが、今回は、近年ずっと興味のあったニューヨークとニュージャージーを選びました。旅行中、色々なホストに「1ヵ月もいるなら、もっとフィラデルフィアやワシントンやボストンに足をのばしたら？」と言われました。彼らの意見が同じ事から、アメリカ人は少しでも時間があつたら次々と別の場所に動くタイプようです。私もそんな気分の時があるでしょう。しかし今回の旅行は、好きなニューヨークとニュージャージーを集中的にじっくり見てくると同時に、アメリカの人々をよく見てくることに重点を置きました。有名な場所を観に次々と移動するのもいい、しかしアメリカの人々と、彼らの生活の様子をよく見てきたい、そういう旅行です。コロンビア大学も、グラウンド・ゼロも、アメリカに行かなくては見れない。しかし、アメリカの人々のアメリカでの生活も、アメリカに行かなくては見れませんからね。

さて、あの1ヵ月間でアメリカで起こった出来事、気付いたことを話していきましょう。

ニュージャージー州で、お母さん、お父さん、娘（7才）の3人家族の家に滞在していた時、その日はちょうど日曜日だったので、私を含め4人でリンゴ狩りに行きました。アメリカは色々な顔を持っている面白い場所です。リンゴ狩りをした所はウマなどが自由に歩き回っているような、とても広い丘で、そこを単に田舎と表すにはもったいないくらい美しい所です。しかし、そこから電車で一時間行くと、あのマンハッタンがあるのですから。私たち4人は色々な種類のリンゴを次々とカゴに入れていき、その日本当に沢山のリンゴを家に持ち帰りました。そして家に着くと、私達は夕食作りと同時に、先ほど取ってきたリンゴでアップルパイ作りを始めました。この家ではアップルパイはお父さんの得意料理のようです。この時点で今日のアップルパイ作りのリーダーとなったお父さんのレニー。彼は大学の先生なので、先生らしくテキパキと私に指示を与え、分かりやすく詳しく説明してくれました。皮をむいたリンゴには砂糖やシナモンをまぶし、生地も全て1から作る本格的なアメリカのアップルパイです。

さて、そのアップルパイのお味について語る前に、1つ。アメリカは沢山の面で日本との違いを持っていますが、男性と女性のあり方も日本と異なります。日本のように「男性だから～をする」「女性だから～をする」というような考えは存在しません。あの日レニーは、張り切って夕食とアップルパイ作りをリードし、お母さんのデボラと私と娘の女性3人は、逆に彼から教えてもらう立場でした。

そして次の日の夜は、デボラが仕事から帰ってくる前に、レニーは夕食の買い物に出かけていきました。そして彼女が家に帰ってくると、すでに夕食が用意されている、という状態です。また、ニューヨークのブロンクスの夫婦2人の家に滞在していた時、テーブルの椅子にカラフルな素敵なおスカートを掛けてあったので、お母さんのゼルダに「このスカートいいね」と私が言ったら、彼女は「デイビッド（夫）が今、縫い直してくれたところなの」と、言っていました。そして私とそのブロンクスの家を出発する日、ゼルダがそのスカートをはいていて、笑顔でこう言いました。「ほら、見て。あの時のスカートよ。とてもいいでしょ。デイビッドは世界で最高に素晴らしい夫よ」と。

今回の旅行で滞在した家庭11組のうち6組が夫婦でしたが、1度も夫のほうが偉そうとか、優位にあるという光景を見ませんでした。平等か、妻:夫=6:4で妻のほうが大事にされていました。日本と逆だと思います。日本では、食事だの、洗濯だの、色々な準備だの、家の中でほとんど妻のほうが夫のために体を動かし、足を動かし、忙しい様子を目にします。また、それが当たり前になっているようです。日本では、妻がほとんど「そういう事」に体力と気持ちを使いますよね。

それでは、「アメリカでは妻は夫のために何にも一生懸命にならないの?」といったらそうではありません。あります、確実なのが、「愛するとき」です。ハグするだけのキスするだけの、そういう時こそ夫のために頑張ります。その他の食事や掃除など、そういうことに関しては、私がアメリカいる間は「夫のために妻が忙しくしている」という感じは一切受けませんでした。彼女らの頭の中は、「『私たち』がお腹が空いたから、そろそろ食事の準備をしようかしら」という考えなのだと思います。

さて、アップルパイの話に戻しましょう。焼きあがったアップルパイは、その夕食のデザートとして出てきました。一緒にハーゲンダッツのバニラとキャラメルの種類のアイスクリューをそえて。その日採ったばかりのリンゴの甘酸っぱい匂い、それにシナモンや砂糖等の甘い香りが混ざって、1から作ったアメリカのアップルパイのいい匂いです。上と下のパイ生地はサクサクのクッキー生地。中のリンゴはいい具合にとろけて、アイスクリームと一緒に食べると全てのおいしさが絡み合っ、日本では食べないような美味しさ・・・The American Apple pie! そんな味です。もちろん美味しかったですし、成功でした。

この他にも、色々な出来事、気付いたこと、感動がありました。また、1から10まで全てパーフェクトだったというわけではありません。なかには苦しかった事、どうしようもなく身動きがとれなくなった時もありました。しかし、日本に帰る時期が近づくと、「ああ、いい人達だったな」「いろいろ学ぶことが出来たな。来て良かったな」という思いをより強く感じていました。

私は、好きな国なら、その国の事を、その国の人々の事を、より深く詳しく知りたいといつも思っています。ゆえにサーバス旅行は私にとって、とてもいい機会なのです。今、次のサーバス旅行の計画を少しずつたてています。

今回、初めてのサーバス旅行に行ったことで、分かった点やより良い計画の立て方の知識を得ているので、次回はいっと素晴らしいサーバス旅行に出来るでしょう。昨日、家にあつたリンゴを砂糖やシナモンと一緒に鍋でコトコトと煮て、甘酸っぱいリンゴ煮を作りました。パイ生地はないのでアップルパイではありませんが、アップルパイの中身のリンゴだけを作りました、あの時のアップルパイを思い浮かべながら。

シナモンが好きな私。今もシナモンを使ったお菓子を作っていると、この匂いがあのアメリカ旅行を鮮明に蘇らせてくれるのです・・・。

(9) Hello Servas Tohoku!

Mia Levin

I am a Canadian living in Sendai City where I am working in a Junoir High School. I am a member of a Programme called JET (Japan Exchange and Teaching Programme). There are two expectations placed on participants in the JET Programme. One aspect of our job is to help young students learn how to read, write, and speak English; the other is Internationalization. The teaching role, although challenging, is understood by most of the participants. However, the idea of Internationalization is more complex.

I think for many members of the JET Programme, the emphasis placed on Internationalization was a surprise. The idea that sharing culture is inherently valuable is not self evident. Most people are fully occupied by the things closest to them. They may watch the International News in the evenings, but once the television is switched off, the only thing that seems important is a person's everyday reality. Upon arrival at their schools, the average JET may think to her or his self, "why do Japanese people want to learn about foreign culture? Why go to all this trouble? I thought I was here to teach English!"

However, as a members of Servas, we understand why Internationalization, not only language learning, is vital. Language and culture are impossible to separate. Students who learn English but do not learn about differnt cultures are being taught an incomplete lesson. In the future, they will not be inspired to travel or live overseas. As a result, they will not return to Japan carrying their new knowledge with them .

JET participants are not only language teachers, we are living examples of Internationalization. In Japan I am a foreigner experiencing a new culture. Although many of my students cannot understand this essay, they listen to me in class and they say "hello" when they see me in the hallway. I am staff member at the school and a part of each student's everyday reality. In these

ways, all of them can understand what I am going through. They can see that although life in a new place is not always easy, it is possible.

It takes courage to leave the things we are comfortable with and it takes incredible generosity to accept a stranger into ones home or workplace. These virtues which are reflected in the mandate of Servas are also integral to the JET Programme. This is internationalization. In the future I hope my students will think about me, think beyond National boundaries, and feel inspired to take on a challenge similar to mine. The world is open, and waiting for them.

* Miaさんは昨年トラベラーとしての認定を受けました。現在 AET として活躍しています。AET としての仕事についての率直な感想が述べられています。

(10) 初めてのサーバス旅行 (2) ・ ・ ・ ・ (T)

出航前は何もセレモニーはない。ただ船がボーと何度か汽笛を出すだけである。見送る人もほとんどいなかった。がらんとした埠頭であった。なかにはテープを投げて、別れを惜しむ人もいたが、華やかさは何もない殺風景な出航であった。ただ一人長髪のおとなしそうな青年が一人若い女性と抱き合い、別れを惜しんでいたのを私は船の上から見ていた。後で聞いたところ、昨夜東京の公園で知り合った女性ということであった。

私のモスクワ経由ウイーンまでの日通ツアーは約20名であった。その内訳は、学生（何と大阪からの高校生が一人いた！両親に頭を下げて旅行に加わったと言っていた。）、教師、会社を辞めた人、主婦で、すべて関西の人たちであった。彼らとはウイーン空港まで一緒だった。

夏の新潟は日没が遅い。7時半頃までは明るい。船は沈み行く太陽を追いかけるように進んでいった。船上では何もすることはない。ただ夕食までボーッと海を眺めるだけである。夕食も日本と異なり豪華な料理がでるわけではない。日本でなら誰も進んで食べようとしめない茶色のパン、スープ、野菜と肉であった。格別印象に残る食事ではなく、これはモスクワを離れるまで同じだった。船の乗務員のなかに日本人のように流暢に日本語を話すロシア人がいたのにはびっくりした。船の中にバスルームがあるのを見つけ、私は湯につかりながらこれからの旅行にあれこれ思いをはせた。

船はソ連のナホトカまで行き、それから列車でハバロフスクへ、そこから飛行機でモスクワまで行き、3日間モスクワに滞在し、飛行機でウィーンに行き、そこで散会することになっていた。時間があれば1週間かけて列車でモスクワまで行きたかったが、時間の都合でそれはできなかった。

船は翌日の午後、ナホトカに着いた。船が接岸するとロシア人の男女の乗務員が多く船上に現れたのにはびっくりした。船は何もない港に入り、我々は船を降りた。概してソ連の町並みは灰色である。建物は古く、道路は悪い。入管へ我々を運んでくれたバスも日本で言えばおんぼろバスだった。入管の建物は日本の戦前の建物を思い起こさせた。社会主義国はどこもこのようなのかと思ひさえした。我々の入国手続きが始まった。現金はいくらも持っているのかを書かされたが、その他は何事もなくスムーズにいった。入管の係員のやけに鋭い眼だけが印象に残っている。入管後ナホトカの町をバスで案内されたが、何も見るものはなく、軍港ということでカメラは厳禁であった。小高い丘へ連れられて行ったが、そこから日本海を見下ろすとサルベージ船があちこち停泊し、軍艦らしき船は見えなかった。私にとってナホカトは初めて見る外国であるが、外国に来たという印象はなかった。回りが皆日本人であったので安心しきっていたのであろう。ハバロフスク行きの列車は夕方出発である。翌日ハバロフスク到着である。列車内では何もすることはなく、船の食事同様車内の夕食もおいしくなかった。列車内で二つの面白い体験をした。一つは列車で働いている若者である。彼らは皆大学生で、日本で言えば夏休みのアルバイトなのである。それはそれでいいとし、彼らが日本人に尋ねる質問は皆判を押したような同じ質問で、政治についてであった。ソ連の共産党をどう思うか、中国の共産党はどうか、日本の共産党と中国の共産党の関係はどうか等である。皆同じ質問をする。なぜこんな難しい抽象的な質問をするのかわからなかったが、ひょっとしたら国の上の方から外国人とは政治以外の話はするなと言われているのかとさえ思ったりした。日本の高校生や大学生でこんな質問に答えられ日本人がいるであろうか。もっと若者に共通な話題が多くあるはずなのに、彼らは意図的にそれを避けているような気がした。

列車は暗くなってからナホトカを出発した。列車の窓からは何も見えない。真っ暗なロシアの大地だけが目の前にあった。ハバロフスクへの途中、突然列車は止まった。なぜ止まったかはわからないが、列車が止まるとロシア人が何人か列車の前に集まってきた。そのうちの一人に赤い軍帽をかぶった初老の男性がいた。列車は日本と異なりかなりの車高である。私は何気なく窓から手を出し、その男性と握手した。ごつごつした農夫らしい手であった。日本の硬貨を一枚彼にあげた。彼はにっこり笑い、私も知っているロシア語(ダスビダーニア)を何度も繰り返していた。彼はまさか日本人が列車に乗っているとは思わなかったのであろうし、私も暗い中でロシア人に会えるとは考えてもいなかった。予期せぬ出来事であった。

列車は翌朝ハバロフスクに着いた。ハバロフスクはナホトカよりはずっと大きい町である。しかし、建物の色はすべてが灰色で、この色はロシア人が好む色なのかと思った。町中が灰色である。華やかな色彩感はない。ハバロフスクでは昼食を食べた。我々のガイドに初老の日本人がいた。出身はどこですか、と聞いたら青森と言っていた。おそらく戦争終了後日本に帰らず、そのまま現地に留まったのであろう。ロシア人の妻、そして子供が何人かいるのだろう。その日本人とはいろいろと話をしたかったが、その時間はなかった。ハバロフスクの町を案内されることもなく、我々は空港へ連れていかれた。例のごとく眼光鋭いロシア人ににらまれるようにして、搭乗手続きを終えた。

我々を乗せた飛行機は翌日モスクワの空港に着いた。昨夜は雨と嵐の天気で、途中飛行機がエアポケットに入り、急降下したことがあった。機内は悲鳴だらけであった。機内ではおちおち眠れなかった。人生で最初の飛行機は苦いものであった。

モスクワ空港からこれまたやはりおんぼろバスで40キロは離れたモスクワの中心地へ向かった。道路の両側には白樺の木が見え、7月の中旬過ぎというのに全く暑さは感じられなかった。むしろひやりとするくらいの天気であった。バスはホテルへ向かう前に川に架かる橋の上で止まった。誰かが走っているバイクを見つけて、「スズキ」だと言った。すると空港からのガイドであるアルバイトの大学生は何と「魚のスズキですか」と言う！モスクワ大学の学生と言っていたが、日本語か日本文化を学んでいたのであろう。それにしても「魚のスズキ」にはビックリ仰天。

我々のホテルは帝政ロシア時代を彷彿させる今ならばどこにも見られないアメリカのエンパイアーステートビルに似た建物であった。ガイドのロシア人学生に聞いたら普通のロシア人はもっと安いホテルを利用すると言う。私が使用する部屋は大きな部屋で二人部屋であった。相手方は新潟の港で女性と抱擁しあっていた若者である。ホテルに到着してすぐ夕食である。ガイドにはモスクワのホテルで食事をするときは正装が望ましいと書かれてあったが、一人を除いて皆ラフな服装であった。バンド付きの食堂での夕食は今では記憶も定かでないが、それほど強く印象に残るものではなかった。夕食後部屋の相棒と大阪の女性の3人で町に出かけることにした。現在と違い当時は日本語でのモスクワ市内のガイドブックはなかった。それに町の通りや表示もロシア語だけで記されており、何が何だか全くわからない。だから地下鉄やバスを使って市内を歩き回ることでできそうに

なかった。今はモスクワの町はどうなっているかわからないが、当時はそんな有様であった。誰かがモスクワの町の表示に英語がないのは外国人旅行者が勝手に町を歩くのをさせないためだと言っていたのを思い出したが、そうかもしれない。ホテルから相当歩いて人通りの多い通りに出た。何をすることもなく、ただ通りを歩き店のウインドーを見るだけ。歩道のベンチに腰掛けてみると、大柄な30台くらいのロシア人が近寄ってくる。何を言っているのか全くわからない。でも身振り手振りから時計とかジーンズとかカメラを買いたいと言っているのは理解できた。仮にそのロシア人に売りつけても受け取るルーブルが本物かどうかわからない。それにナホトカでの入管で所持金を書いている。もし出国時に物々交換ならば何とかメリットがあるかもしれないが、ロシア人から現金をもらってもたとえそのお金が本物だとしてもすべてモスクワの町で使い切る必要がある。何に使うか。何も証拠が残らないようにするにはおいしい食べ物を食べてしまうことだ。もし調べられて申告以外のルーブルを所持していたらそれは没収である。それにヨーロッパではルーブルを他の国の貨幣には変えられないと聞いた。いずれにせよ、ロシア人に日本の物を売ってもいいことはない。ロシア人と何だかんだと言いつつ合っているうちに旧に雨が降り出した。我々は急いでホテルに戻った。ホテルの前の長い歩道を信号の変わり目に横切ろうとしたら、警官から「パスポルテ」を見せろと言われた。パスポートを見せたら、我々の顔と写真を穴があく位見ている。

モスクワには3日間いた。その間我々は市内を案内された。モスクワ大学、地下鉄試乗、物産展、観劇、ベリョースカ（免税店）。一度グループの何人かで町へ出かけた。喫茶店に行こうということになり、探したが見つからない。一人の若いロシア人に「カフェ」とか発音したら、その若者は我々を喫茶店に連れていってくれた。そこは確かに若者が集まる所であった。古い「蓄音機」から何年か前にはやった「恋の季節」が流れてきて、ロシア人はそれに合わせて踊っていた。モスクワのとある喫茶店での蓄音機から聞こえてくる日本の歌一何と奇妙な光景か。郷愁に浸ることなども出来ず、ただ異国での不思議な体験に私はいやに冷めた気持ちで喫茶店内のロシア人を見ていた。

概して団体旅行は決まり切った観光をするだけで、人と人の触れ合いはない。旅の醍醐味はやはり旅の間にごくこへ行ったかよりもどんな人に会い、どんな触れ合いがあったかであろう。もちろん観光も重要だが、それが旅のすべてではない。ウィーンまでの今回の団体旅行はその意味では余りいい印象は残っていない。何よりも言葉が通じない。英語を話すロシア人は結構いると思うのだが、そのようなロシア人と会う機会はなかった。いつも日本人と一緒にだった。それにロシア人も外国人を敬遠しているような印象を受けた。これが社会主義国なのだろうか。モスクワ滞在も終わり、いよいよウィーン行きである。そこからは本当の一人旅が始まる。いやがうえにも気持ちが高ぶっていた。

会議案内

(1) 第23回国内会議が以下の通り東京で開催されます。

期日：2007年3月17日（土）

午後1時開会～6時まで会議

午後6時～9時まで懇親会

2007年3月18日（日）

午前9時開会～12時まで会議

12時解散

場所：東京都大田区生活センター第5会議室

(2) 第4回目の極東アジア会議が以下の通り釜山で開催されます。

期日：2007年4月7、8日（土、日）

場所：アリランホテル（釜山駅前）

参加費 70米ドル～ 到着後、ホテル受付で払うことになっています

第1日目：14：00 開会ならびにゲスト紹介

14：30 各国会長によるレポート～中国、香港、台湾、日本、韓国

15：10 国際本部副会長の話～サーバス憲章、世界各国の状況、サーバスが抱える問題など

16：10 極東アジア地区会員と他地区より参加したオブザーバーとの懇談

17：00 1時間休憩

18：00 夕食および懇親会、記念撮影など

19：30 閉会

20：00 参加者は各自の部屋へ移動

第2日目： 9：00 分科会 ①サーバス憲章について

②極東アジア地区内の交流を深めるには

③サーバス東南アジアとの交流を深めるために

10：00 バスで慶州見学に出発

12：30 慶州で昼食

17：00 宿泊希望者はホストファミリー宅へ移動

お知らせ：

①日本から参加を希望される方は、各支部長を通じて会長へ申し込んでください。遅くとも3月10日までにお願います。サーバス韓国へ連絡する必要があります。

②国際本部役員（EXCO）も参加予定です。

③東南アジア、南アジア（インド）からもオブザーバーが参加する予定です。

（3）支部総会のお知らせ

本年度の支部総会を以下の通り開催します。

日時：4月28日（土） 11時より

場所：仙台市青葉区中央市民センター（青葉区一番町二丁目1-4）

詳細は後日お知らせします。